

トピックス

1. 「社労士への道」第5回 開業
2. 播州日誌 「マスク あれこれ」



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 37

2021年1月号

年頭にあたって 「大いなるもの」

新年明けましておめでとうございます。コロナ、コロナの1年でしたが、その収束の声を聞かぬまま新年を迎えました。第3波の波は大きく、医療崩壊の危機が続いています。大自然の猛威は人類の存在をあざ笑うかの様に縦横無尽にキバをむき、その手をゆるめることはありません。見えない敵は人々を恐怖と不安の闇にとじこめています。ようやく使用が許可されたワクチンの登場はその闇に現れた一条の光のように思われます。

去年12月13日(日)早朝。いつものようにウォーキングに出た私は東南の空に現れた宇宙からの贈り物、天体ショーに釘付けになりました。下弦の月に飛び込んでいくような金星。月と星の大接近。雲一つない夜明け前の空に燦々と輝くその美しさにしばしみとれてしまいました。11月には、はやぶさIIが52億キロの旅をして「りゅうぐう」におりたち、ガスや石片を採取して地球にもどり宝箱を放出した後、再び次の目標である小宇宙(小惑星)をめざして飛行を継続。11年後に到達予定という。生きて、その壮挙を見聞できるかどうか？

果しない宇宙を思う時、奇跡のかたまりのような地球上に生きる私達の存在の微小なる事を思わざるを得ない。そして、そこに存在する何か得体の知れぬもの「大いなるもの」を感じざるを得ない。「大いなるもの」とは人類数千年の歴史の中で多くの人々が「神」と呼び「仏」と呼び「天」と呼んできたもの。私はもともと無神論者であるが、長い人生で行く度か極限状態の中で確かに「大いなるもの」の声(?)を聞いた事がある。そしてそれによって厳しい現実、逆境の中で「生きている」だけでありがたいと思うに至ったのである。

意識世界において私達は自由にものを言い行動する。しかし無意識の世界では、深層心理とも言われる世界でしかと確認できるものはない。無意識も意識すれば「意識」となりこの世に顕在するものとなる。究極のところ私は、何かに行きづまった時、「大いなるもの」を實在のものとして意識し、解決を図ろうとする。しかし「大いなるもの」は沈黙にして語らず何かを教えさずけてくれる訳ではない。自問自答をくり返すうちある瞬間にひらめくものがあり、それが問題解決につながったのである。



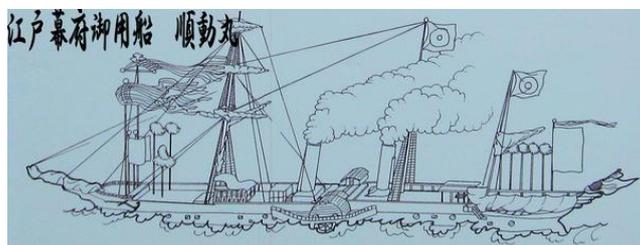
私達が「よきこと」を希求すればする程、その希望は遠いものになる。とすると、私達は無意識の世界に極限のポジティブな思いを充満させることによって「よきこと」への道を一步前進させることになる。希望することが叶おうと叶わなからうと物事がうまくいこうがいこまいが、それは「大いなるもの」からの強いメッセージであり、その「大いなるもの」は自身の心の中から発せられるものである。心のうちなる「大いなるもの」を信じる事は自分を信じることであり、自分の

身体の健全さは日頃の行動や言動の積み重ね（鍛錬）から、生まれてくるものである。そう考えれば自分のまわりで起る全ての試練は、自分が成長する過程であり現在、過去、未来を全肯定、絶対肯定することにより強靱なものとなる。それこそが本当の意味でのポジティブ志向でありポジティブな生き方となる。鏡のように自分の姿を写し出してくれるもの。それが「大いなるもの」の実像であると思う。

皆様にとって今年一年が幸多き一年でありますよう心からお祈り申し上げます。

龍馬と私 龍馬脱藩後の足跡 (5)

神戸海軍操練場の建設が決定されたのは、龍馬が脱藩罪を赦免されて2ヵ月後の文久3年（1863）4月23日だった。将軍徳川家茂が大阪湾沿岸の警備状況を視察するため幕府軍艦「順動丸」で和岬に上陸した時のこと。勝海舟が建設を建言し家茂が即断したことで決まった。幕命により勝は主任に任命され、年に三千両の予算が組まれ神戸村小野浜に敷地 17,437 坪が与えられた。龍馬が勝の代理として越前、松平春嶽から借用した 5,000 両は、勝海舟が同時に私塾を設立。もっぱらこの費用にあてられた。設立の目的は尊皇攘夷派の志士達の教育だったが、彼らはそのまま操練所のスタッフとなった。9月には大阪宇治川から神戸に移転し、操練所の北、生田神社の近くに塾舎を移した。塾と言っても実質は若者達の宿舎であった。10月には龍馬が塾頭となる。しかし後年、この勝海舟の私塾そのものが問題となり勝海舟は江戸に呼び戻されることになる。元治元年（1864）5月には幕府による操練所生の募集が始まり 100~200 名の採用となる。幕臣の子は幕府の寄宿舎に、諸藩から応募したものは勝塾を宿舎とした。龍馬たちはひたすら操練所で海軍術を学んでいたが、夢のような操練所での学びも秋には終わる。勝が軍艦奉行であるにもかかわらず尊皇攘夷派の「激徒」を養っているという嫌疑を受け、10月22日江戸帰府を命ぜられた。さらに11月10日付で海軍奉行を罷免される。勝塾は閉鎖、神戸操練所も慶応元年（1865）3月18日で正式に廃止となる。藩命で修業に来ていた塾生はそれぞれの藩に戻ることができたが、龍馬らは二度目の脱藩者になっており放り出され路頭に迷うことになった。操練所は殆んど成果を見ることもなくわずか2年で歴史から消えてしまった。しかし、幕末に若者達が集って海軍術を学び得たということは、きっかけとしてその後の若者達の行動に何らかの影響があったことは疑う余地もない。幕末の混乱の一コマが浮かびあがった出来事ともいえる。この龍馬の逆境に救いの手を差し伸べたのは薩摩藩であった。歴史の歯車はさらに時を刻んでいく。



播州日誌

「マスク あれこれ」

東アジアの人々は日本人を含めてマスク着用には抵抗感が少ない。世界的に猛威をふるい続けるコロナ禍の中で感染者や死者の数は欧米諸国に比べて圧倒的に少ない。その理由について BCG 接種の効果であるとか遺伝子（DNA）の関係だとか色々と言われているがそれ程科学的根拠に基づくものではない。コロナ禍で色々な事が白日の下にさらされたが、日本人の知らない事実もたくさん出てきた。マスクについての考え方が国民性の違いもあり各国でかなり大きく異なっているらしい。例えば欧米では WHO が最初に言っていたマスクの感染防止の効果には科学的根拠がないという発表（後に他人にうつさないという点で一定の効果があると訂正）をうのみにしてマスクを拒否する人が多い。イギリスではマスク着用を会社のルールとして乗客に強要したバスの運転手が暴行を受け殺害されたり、マスクをしていた日本人がバイ菌あつかいされたり、バスの中で少年 2 人にマスク着用を促した看護師の女性が暴行を受けたりといった事件が続発した。又、大規模な反対運動、暴動、略奪まで引

き起こしています。日本、韓国、台湾などでは、政府からマスク着用や営業時間短縮を要請されたら殆どの人が抵抗なくマスク着用や短縮にに応じています。欧米ではどうやらマスクをしている人は元々病人であり何かあやしい人だという見方があるようだ。口元の動きは言語を発する時のその人の感情や仕草の重要なポイントであり、それを隠す行為は悪い事であるらしい。イギリスやフランスでは元々自己中心的な人が多く、国の言うことを聞かないのが伝統であるらしい。マスクをしない権利もあり、コロナにかかる権利を主張する者もいるという。困ったものだが国民性や歴史的な伝統となるとちょっと修正がききそうにない。

今、日本は清潔な国として世界の注目を集めコロナ禍終息ともなれば一番に行ってみたい国 No.1 であるらしい。日本人としては 面映い感じがしないでもない。私達の近くにも矢張、自己中心的な人が増えてきている様な気もするし、残念に思うこともある。清潔な国民であり続けることが第3波に見舞われている現状を少しでも良い方向にする力となるかも知れない。いつまで続くかわからないコロナ禍の中であって、まずは「うつらない、うつさない」を基本にしてコロナに対応していきたいと思う。



2020.12.13

「社労士への道」

第5回 開業

平成8年1月1日。福留経営労務管理事務所の看板が2階のベランダから張り出すようにあがった。看板をあげたのはいいが、日常生活に何の変化もない。毎日行く所もない。とりあえず社労士会や支部開催のセミナーには必ず出席することにした。当時はセミナーに出席すると赤いゴム印を、社労士手帳に捺印してくれた。社労士になって初めての公式の場というのが、姫路支部の新年会。5.60人も集まっていただろうか。数名の新入会員が紹介されたが、確か最年長であったと記憶している。48歳決して早くないデビューだった。名誉でも何でもないが最年長ということで最後に挨拶をした。何を話したかは全く記憶にない。ただ社労士会というのが、優しい人の集まりなんだと感じたことが記憶に残っている。姫路支部では（他支部も同じ事かも知れない）新入会員は必ず支部長の事務所に挨拶に行く習慣があった。冬の1日、支部長の事務所を訪問する。2階建てで1階が車庫になっている。数名の職員さんが机に向かっていた。応接室で面談。本会でも活躍されている先生だけに貫録がある。型通りの挨拶の後は雑談となり前職のことなど聞かれた。社労士で飯が食えるかどうかの話になり、「私がこうして事務所をもってやっていけるのだから、福留さんはきっと立派な社労士として活躍できる人だと思うよ」と言われた。柔らかく優しく接して頂けて本当に充実した1日となった。話の途中で、SR（兵庫SR経営労務センター）に直接加入の電話をいれていただき即入会ということで書類を送ってもらうことになった。加えて労働相談の基本となる本も2冊頂いた。少し目の前が明るくなった気がした。胸さわぎのような高揚した気分で先生の事務所を後にした事が、昨日のこのように思いだされる。ちなみに後日、他の社労士さんに聞いた話だが、新入会員に対して支部長先生が「君ならやれる」とうのは皆に言っていることだと打ち明けられる。自分

だけかと思っていた私は、少しがっかりしたが、流石支部長をされる先生だとも思った....。変わらぬ日常が続いた。

ある日、新年会で名刺を交わしたT先から、突然のお誘いを頂いた。「何時から赤ちょうちんという居酒屋で飲んでいるから、よかったら来てみたら」といった内容だった。何でもみたい、聞きたい、知りたいと思っていた私には、ありがたいお誘いでふたつ返事で自転車で15分くらいの距離をかけつけ、合流した。息をきらせて合流した私を大歓迎して下さり、早速乾杯、かけつけ三杯という感じだった。T先生、H先生は3年程先輩、F先生は5年以上先輩の先生で、目下活躍中のバ



リバリの3人だった。色々な話をさせていただいたが印象に残っているのは次のくだり。「仲々、顧問先が決まらず、暇を持て余しているのですが、本当に社労士で食べていけるのでしょうか」という私に、「福留先生、厚かましい事を言ってはいけませんよ。」「そうやねえ、我々も2年間は何もする事がなくて、寝ていたよ」「寝てたんですか」「そう寝てた。寝っとたよな。」他の2人が大きくなづいて「寝とった。寝とった。」という話になった。開業から数か月がたち何の変化もないことに少々焦りのようなものを感じていた私も、そうか、寝てたんか。みんな最初はそんな事なんやと合点がいき、何か胸のもやもやがずっと消えたような気がした。「社労士になった目的はどんなんですか」との問いには、2人の先生は至極あたりまえの答えだったが、H先生の答えが変わっていた。「そんなん決まっとるやろ。お金稼いで魚町、塩町の高級なバーやラウンジで姉ちゃんと楽しくやることやんか」「ああ、そうなんですか。」「それもいいですね。」何か訳の分からない事を言ってしまったが、その時の様子が今はよき思い出として残っている。

そんな仲間の暖かいアドバイスもあったりして、徐々にやる気になってきた。一番最初は就業規則の変更の相談だったが何とかやり切ってほっとした。居酒屋での会食がご縁で週に3日程、T先生の事務所に出勤し、手伝うことになった。約1年間ではあったが、時給いくらという感じで日銭が入ったのと、とにかく社労士としての仕事に携われることが嬉しくて一生懸命だった。赤っ恥もかいた。労働保険の新規適用の用紙をハローワークへもらいに行った時「一元ですか、二元ですか」と聞かれて突然だったので「両方です」といってごまかしたり、社保の資格喪失で被保険者証を持参するのを忘れてしまったり、離職票の誤りをハローワークの窓口で職員に直され、離職票が訂正で真っ赤になったり。私の顔もその都度真っ赤だった。一番印象に残っているのは労災、死亡事故の遺族補償の請求。病院の証明も初めての経験で、仲々やってくれないので窓口でけんかになったり、被災者会社の印をもらうのも少々時間がかかった。T先生から請け負った仕事だったが、初めてだらけの事で、その達成感は格別なものであった。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



～SDGsの詳細については次号より連載致します～



《お知らせ》

時節柄、年始のご挨拶はご遠慮させていただきます。